

野性獣類の獲り方

(座談会続き)

徳永

それでは、昔の川と川魚の獲り方これ位にして、野性獣類の方に話しを移したいと思います。野性獣類も又魚のように、開拓当時の人としては、蛋白源として貴重なもので、様々な方法で捕獲していた昔の話をして下さい。

室井

そうだね。誰でも一般の人がやったのは、兎を獲る罠だね。兎は、山から畠の方に、冬になったら餌を探しに出て来るが、兎は一度歩いた自分の道を、必ず通ると言う習慣があるから、立木の中だったら適当な高さを利用して、細い針金を丸く輪にして、兎の通り道に丁度その輪が兎の頭が入るようにして、ぶら下げて置くと、通りかかった兎が、その針金の輪に引っかかって、首が締められて死ぬ。立木のないところを兎が通る道だったら、そこに杭を打ち込んで、針金の輪をつけて置いたようなことでも獲れた。こんな方法の野兎の獲り方は、雪のあるときだった。

矢吹

昔は、至る所に藪があった。隣との畠の境界等も、自然の藪で場所によっては可成り中広い境界の藪があったから、兎なんかいくらでも隠れるところがあったから、子を生んで

も鷹などに捕られることが少かったから、ずい分兎がいたね。

穴戸

ビートなどの畠に初雪が降った頃、葉っぱ喰いに来る兎は、ビートの葉を、沢山寄せておいて、兎の通れるだけの中に二本がっちり杭を打って、その杭の間の外。ぐるりと蓬の枯れ茎を、ビートの葉を囲むように突き刺して置くと、兎は、自分体の通れるところの杭の間を通って、ビートの葉を喰うために入ろうとしたら、先程室井さんが言っていたように、その杭に、針金の輪を付けておいたら、そこで首が引っ掛かって獲れると、私はやったことなかったが、やった人から聞いたことがあった。

実盛

佐呂間は、何処に行っても山が見えるからか、野兎と言うより、山兎と言う人が多いんじゃないかな、

山兎は、雪が降って来ると、畠の豆の脱穀した豆稈や、ビートの葉がまだ兎の力ではじくって喰えるころ出回って来ると言うが、真冬の大雪の年でも昔は、兎の足跡が餌のないようなところにもあったが、野性であるため喰うことに大変な苦勞しているんだな

山口

私が何時だったか聞いた話なんだが、その人の法螺かも知れないが、兎の習性をよく知っている人だと思うのだが、自分で罠を仕掛せず、他人が仕掛けている罠が、どの辺にあ



兎が針金罠にかかった図

るか大体判るんだと言っていて、毎日ではないが、月に一回か二回位いたずらに兎毘のありそうところを、かんじきはいて夜中に歩くんだそうだ。そうしたら一匹か二匹必ず他人の毘に引っかけた兎を持って帰ったとか、それもわざわざ、隣近所の子供が仕掛けた所でない部落の違う場所に行つて獲つて来たと言ふんだ。

會長山内

昔は、そんなことは当り前のようだった。取られた人も、「やられた」と思うだけで、犯人探しもせず、友達同志の集まったような場所です。「俺の仕掛けた兎毘、針金がなくなつていた。朝早く見に行つたのに、誰か俺のより早く行きやがつて。俺の毘に引っかけた毘の兎持つて行きやがつた」

高田

昔のように野性の動物の多い頃は、兎などのようなものでも言う面白い裏話があつたの、私も聞いたことがありますよ、

それに猟銃使つての兎獲りは、猟銃使つた人は、撃つて当つたら本人が喜ぶ位いで、特別な話はなかつたね。

徳永

今私がしゃべれば法螺吹くようになるが、真実の話です。知来の奥の尚和に戦後開拓に入つたとき、ずい分山兎がいて、私が若い三〇才代、畠に出て来た山兎を、走つて追い回して弱つて動かなくなつたの摺んで獲つたことが二回位あつた。畠の緩い下り傾斜を下

に向つて追つたら、兎は後足が長いので、体が逆さまのような形になるから走りづらいかも。こちらは緩い走り易い。そんなことで、三〇年尚和にいたが、山兎の手摺みは二回位しかなかつた。

一寸話はずれるが、八月の燕麦刈りのとき、午後の暑い盛りするとき、畠の向う側に刈りながら到着したとき、ふと頭を上げたら、畑のはじめ藪の手前で、青大将が兎に巻き付いて呑み込もうとする瞬間だつた。びっくりしたなあ。あの時の青大将は可成り大きかつたが、兎の体と、青大将の頭や口と比較したら、それは小さいものだが、青大将は、やつと食にありついた嬉しさか、人が近づいても全く気がつかず悠々と兎を呑むのだが、あの小さい口から、兎が青大将の口の中に入つて行くの、私もぼう然としていたので、どれ位の時間がかつたかは判らないが、大自然の中の、弱肉強食の様を間の当りに見る体験は、ないよりもと言へるけど

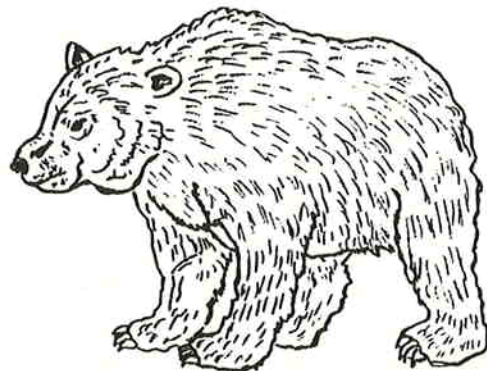
あのときの兎は、おそらく。熟した燕麦の実を無中で喰ひ始めたばかりに、青大将に襲われたのでせう

司会しながら、私が話を横道に入つてしまいました、

話を、熊のことに入つて行きませう。

室井

北海道の熊は、内地の熊と種類が違つて、罷と言うが、熊を獲るに口発破という火薬を使って開拓当時の熊獲りに使つた話は聞いて



いるが、どんなものか見たことがないが、火薬でも特に爆発しやすいとかで、ずい分早くに使用禁止になったとかで、今日ここに集まっている一番長老の方の、山内さんや実盛さん見たことありますか、

山内・実盛

いや見たことないし、口発破で熊獲った話も聞かないが、私等の子供の頃、闇で使っている人がいても、禁止されているため、こっそり使っていた人は、他人にしゃべらなかつたと言ふことも考えられるね。

室井

うん、私の子供の頃（昭和始）聞いたんだけど、私に話し聞かせてくれた人は、熊獲りの口発破実際に見た人からくわしく聞いたが、現物を私は見ていないので、今くわしく説明出来ないが、熊が喰いたがる餌の中に、その口発破を入れておいて、熊のいる近くに置いておくと言ふことで、熊がそれを喰べたら口の中で爆発する。そうして死ぬ、それが熊獲りの口発破と言ふのですね。

高田

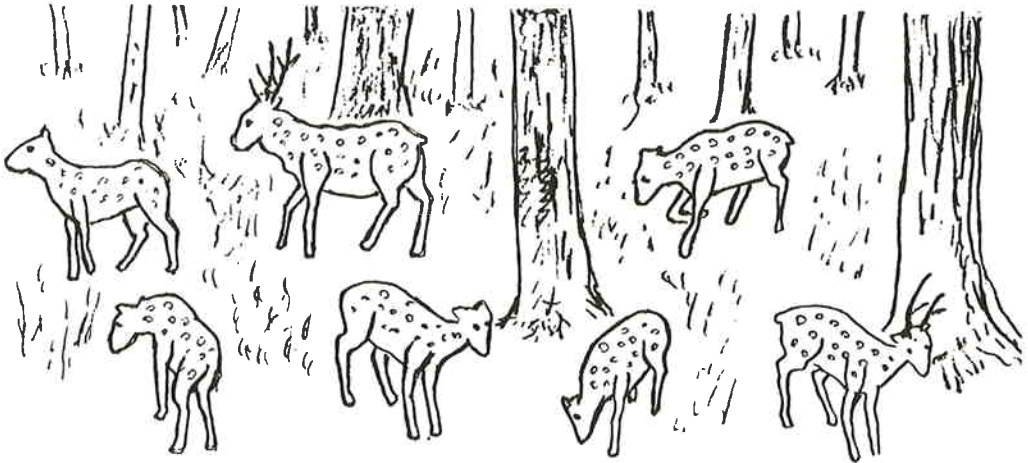
口発破が禁止されたら、熊獲りは猟銃使つて獲るより他に方法はなかつたでせうね。

徳永

それでは鹿の話に移りませう。鹿は、今日出席されている方々に、子供の頃や。戦前に見たことありませうか、

会長山内

私は明治生れだが、殆ど戦前は、鹿なんて



鹿の群、昭和55年に尚和の国有林内で、私が7頭の群を見たときの状況

見ることもなかつたし。鹿が島に入った話は全くなかつた。

実盛

最近、鹿の交通事故の話もあるが、佐呂間の中であちこちにも出る話があるね。

徳永

鹿の話で昔特に、こうだあ、だとの話がないなら、話を狐や狸の方に移りませう。只一つ鹿が、私が尚和の誰もいなくなつた処で、自分の元の家に用があつて出かけた昭和五年に、七頭の群に出合つたことがありましたが、昭和四五年頃から、時たま一頭位に出くわすことがありました。

狸狐の話に移りませう。

実盛

狐の肉は、食べたと言ふ話は聞いたことないが、狸の肉は旨いと言ふ話を聞いている。昔、武士で岡川さんと言ふ人が、明治の終り頃長野県から移住して来て、雑貨屋をしていた。道楽に、猟銃を持っていたが、佐呂間の開拓当時の、野性動物が余りにも沢山いることに目を付けたのでないかと思うが、

その岡川さんから直接話を聞いたが、狸の数は、他の野性動物よりずい分少かつたと言つていたが、狸を獲つて喰べたら本当に旨かつた、他にあれだけ旨い獣はいない。晩めに炊いて残つた翌日の朝、鍋の中の狸汁がごつてりと固まっているのなんか、熱いご飯の上その狸汁の固まったのを、乗せて喰べるなんてしたら旨いもんだと言つていた。

狸の肉は、臭くて喰えないと言う人がいるがあれは全くの嘘で、狸の数が少いから獲って喰ってみる人が余りいなかったから、狸は臭い等想像して旨くないと言っていたのでないかなと、岡川さんが言っていた。

会長山内

狸が喰べて旨いなんて話始めて聞いた。狐は獲っても喰べた人がいたろうが、何故か私がこの年になるまで、狐を喰った話が聞かれなかったが、昔は、貴婦人の狐の襟巻がずい分流行って、現のミンク以上のもて方だったので、猟師が狐打ちを副業のようにしていた人もいた。昔、あれだけの狐を襟巻にしたんだから、狐の肉の味の話がないのだから、一回喰って旨くなかったから、次に獲っても喰べなかったか。狐を喰べたと言ったら、「お前そんな物喰うのか」など言われるのを恐れたんだらうか

開拓当時の、食糧確保に大変なころ、襟巻になった狐は、毛皮だけ猟師が金にしたと言うより、肉も自分達も喰べて、隣近所に配ったり、場合によって現金収入にしたのでないかな、

徳永

狐汁のお伽話がなかったが、狸汁についてのお伽話が子供の頃本で読んだ記憶はあるが、今どんな物語りだったか筋書は、はっきり思いつかないけれど、狸の毛皮が貴重なものと言う話はなかったね

高田

一寸私が思いついたことがあるが、昔衣料について、自給自足を一般の人が求めるために、綿羊を飼うことが流行った。その始まりはよく判らないが大正時代か、昭和の始まりころか、それはまあどうでもよいと思います。が、戦前は、あれだけの綿羊を飼育していて、綿羊の肉を喰う人がいなかったね。綿羊の肉を食べても、食べたと言わなかったのか、

食べるということは、日本人の佛教思想の四つ足を喰わないようなところから来ているのではないでせうか。

杉本

我々は、今日専門的な、食についてとか、佛教についてとかの研究する時間がないから、何だけど、高田さんの話等のようなことがあったかも知れませぬ。

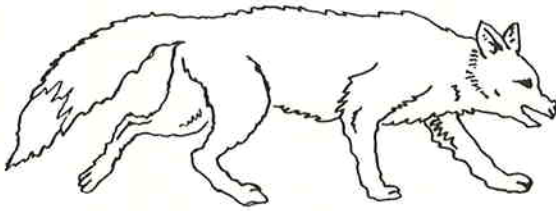
徳永

佐呂間の開拓時からの、大自然から、人手を加えた形が変化する中に、自然動物の利用から家畜の利用にも変化があつて、開拓当時から戦前戦後に、ずい分重要視された綿羊も飼っている家もなくなりましたね。

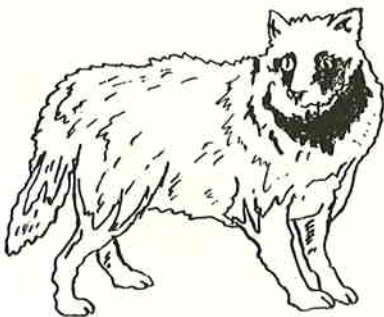
それでは話を切り替えてイタチについて話してみませんか

山口

イタチは、只毛皮取り位いで、竹筒の毘で



キツネ



タヌキ

獲って、毛皮をはがして売ったと言うことが
主な利用方法で、子供が小さい慾しによく
獲っていたが、イタチは、小さいな土橋の下
当りに、竹筒の虎鉢に目差しの頭なんか入れ
ておいて仕掛けたが、上手に獲る子はいい小
使いになった。こんな話は小学生のころ友達
から聞いた話なんだけど

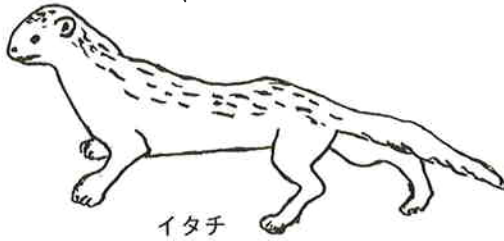
そのうちに、野ねずみ退治のため、イタチ
獲りが禁止になった。イタチの毛皮は、一時
かなり高いときがありましたね。

会長山内

野性動物にしても、家畜の牛馬にしても、
それらの毛皮の取引で買ってくれる商人は、
大体何処の町村でも昔は馬具屋がやっていた
が、自家用の毛皮も、馬具屋に頼んだら、鞆
(なめす)業者に鞆し
てもらえた。よく牛の
皮の敷物や犬の毛皮の
袖無しなど昔はよく鞆
皮にして使っていた

徳永

佐呂間の、昔の野性
動物の獣類の話が、こ
の当りで切り上げても
よいかと思えますので、
次は、野性鳥類の獲り
方に、議題を移したい
と思います。



イタチ

野性鳥類の獲り方

徳永

佐呂間の、昔の野性動物の獣類の話が、こ
の当りで切り上げてよいかと思えますので、
次は、野性鳥類の獲り方に、議題を移したい
と思います

穴戸

一番誰もがやった法方に、スズメやカケス
を、米とか麦の餌で、穀物の脱穀のとき、実
と芥と振り分ける「通し」というものを伏せ
て、四〇センチ位の細い棒で、片方を持ち
上げて支えて、その伏せた通しの下に、米
とか麦をばら撒いておく、支え棒の下の方に
縄を締めて物陰まで引いて置いて、スズメが
入って餌を喰っている処を目掛けて。縄を急
に引っぱって、支えの棒を外すと、スズメが
通しの中で獲れる。

カケスは、唐黍
を入れておく方が
よかったようだっ
た。通しでカケス
獲は、スズメより
獲り易かった。

室井

雪が降って、山
や野原が覆われて
来たら、スズメ達
は、人家の近くに

寄って来て、
収穫作業所の
小屋の中に入
って来て、脱
穀のさい散ら
かった僅かの
麦や米を拾い
に来たときに、
そんな罾が仕
掛けられてい
るとは、露知
らずに入るん
だから、寒ス
ズメは旨いも
のだったね。
秋の稔りの穀
物や外、山野
の餌を充分に



子供がとうしで雀を獲る姿

喰って、ほんほんに肥えているから、

矢吹

カケス獲りに、弓のように、しなりの強い棒で、紐でもって引っぱって、唐黍を仕掛けていて唐黍を喰いに来たとき、バツと足を鉢む仕掛けでカケスを獲ったことがあった。獲ったカケスは、只金網の箱で飼って見ただけだった

徳永

私は、若いころ、通して獲ったカケスを、喰って見たことあったが、何故か全く旨くなかった。稔りの秋の一番肥えているころだったのに。そう言えば、カケス喰った話は殆どの人がしていなかった。やはり昔から、一度食べた人が旨くなかったらもう喰わないのだと思うね。

山内

私の子供のころ、大人の人が言っていたが、開拓に入った二・三年は、スズメは殆どいなかったと、カラスも少なかったと言う話で、外の小鳥は珍らしいのが沢山いたそうだが、こんな話から考えると、スズメやカラスは、人間に付いて来るのでないかとあのころの大人達が言っていた。

高田

原始の森林や笹藪ばかりだと、スズメの喰うものもないし、スズメが開拓当時になかったと言うのは、山内さんの話を聞いて判るようです。

カラスでも、森林ばかりや笹藪などよりも

開拓された処の方が餌にあり付き易かったかも知れませぬね。

実盛

鴨猟に又面白い話があるんだよ、狸汁の話をしてくれた岡川さんの話だけど、鴨は、今は禁猟になっている保護鳥だろうが、昔は、春から秋までずっと佐呂間の川に住みついていた。冬は渡り鳥だから、南の方に行っていた。冬は渡り鳥だから、近頃鴨を春から秋までに姿を見たことありますか、

皆んな、

そう言えば、気が付かなかった話だが。夏に大川に鴨がひよこ連れている姿見ないね

実盛

岡川さんは、猟銃で撃っても鴨は獲り易かったが、大川の中を泳いでいるの、岸の方から柳の林の中の藪から撃つのなら、本当に狙い易いが、水の流れと深さを考えなければ下手に撃つわけに行かぬが。春から夏の鴨は殆ど大川にいて、ひなを育てていて、獲って喰っても旨いものでなかったがと、岡川さんは言っていた。

考えて見ると、繁殖のため、卵を産み、ひなを返すための、雄と雌の体力は、そちらの方に使い果しているのでは、春から夏の鴨は旨くないのが本当だろうね。

秋の鴨が旨いと言うのと、簡単に虎銕に掛り易いと言う話なんだね。

徳永

私は、その岡川さんの家の隣りに生れて、

小学校時代の、同級生の友達もいるのだが、そんな話は始めて聞くね。

実盛

徳永さん、岡川さんの近くの生れかい、

徳永

ここにいる山光友先生も、岡川さんの下手にあった教会の牧師さんの孫だし、(一寸話が脱線しました)

山口

僕も、子供の頃その辺で育っています。

実盛

はあ、こう言う座談会があつて、色々な、知らなかったことが判つて来ました。話を元に戻して、

鴨を虎銕で獲るのは、岡川さんは、色々な動物の習性を、感でもって、よく判る人なんだな、大正一二年に渡部長太郎と言う人が、佐呂間町の水利組合副会長して、佐呂間町内の造田に尽力して、渡部長太郎さんの水田が岡川さんの回りに出来た、

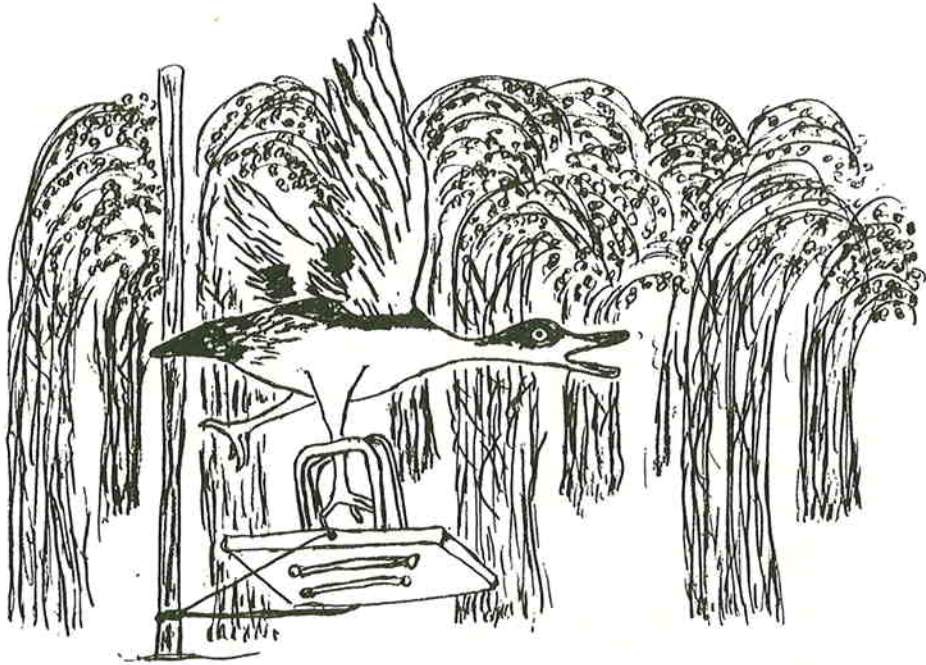
そうしたら、秋になって、米が稔つて来たら、渡部さんの水田に、鴨が翔び来たり翔び去ったりする姿を見て、「はあ、稲の実を喰いに来ているな」と気付いたものだから、よく観察していたら、稲の実を喰いに来た鴨は何故か。畦の側ばかり歩いて、田浦の中の方に入らないことに気付いたから、「こいつを獲るのは、餌は要らない、虎銕だけでよいと考えたから、そのように、外の水田だけで、鴨獲りの虎銕を、渡部さんの田浦に虎銕を、

一〇ヶ位い毎年仕掛て鴨を獲ったが、雛育て終った親鴨、成長途中の食慾旺盛な若鴨、増えた鴨が、わっと、秋の稔りの稲の実を喰えばどんなに鴨が肥えているか。七月八月か頃から島の麦、燕麦、稲黍などを喰った後で秋の米を喰うのだから、こんなことで秋の鴨は旨いもんだつたと、岡川さんは言っていたね。

徳永

いやー珍らしい話でした。野性鳥類の獲って食べると言うのは、スズメと鴨位いで、我々の子孫では、もうそのようなことが起こらないでせうね

こう言うことは、北海道の歴史の中にも貴重なものになるのではないでせうか。後、野性鳥類の捕獲し、食料にした話がないのでしたら、次に「昆虫で食べられるもの」と題しての方に話を進めたいと思います。



虎鉞にかかった鴨の姿

佐呂間の昆虫で食べられるもの

徳永

佐呂間の野性動物のことで、食べるためか、毛皮の利用とかの珍らしい話が、ずい分今日は皆さんから聞かれました。

それでは今から、「佐呂間の昆虫で食べられるもの」と題して、皆様の知っていることを話してみたい

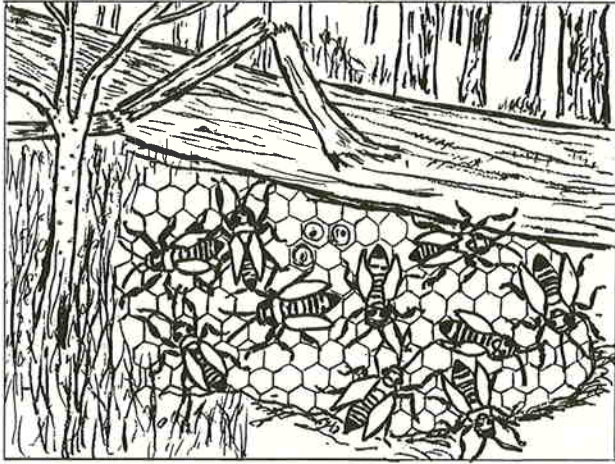
室井

そうだね、昆虫で食べられるもの、佐呂間の中では、蜂の仔と、鉄砲虫位いでないかと思うが、

徳永

今室井さんの言われた、蜂の仔や、鉄砲虫等食べれる昆虫だが、蜂の仔のたべれるの、うちで獲ったのでなく、親父から知り合いからもらったの食べたことあります

鉄砲虫は私の子供達が、知来の奥の尚和にて営農していたころ、私の息子と娘が、小学生になつていたころ、友達から鉄砲虫が旨いと聞かされ、友達のところまで獲ったの、焼いて食べさせられ、余り旨いと言うので、自分達で、山の中に入って風倒木の腐れかけの木を見付け、子供の力でほぐせるような木の中にいたのを、見つけて持って帰り、焼いて食べているところが夕食頃だったので、私がうちに入って、「父ちゃんに「つくれ」「もうないよ、こんど獲って来たら、父ちゃんに、食



山肌に作られた泥蜂の巣想像図です。
子供の頃見たの思い出して絵を画いてみた。

べるの残しておいてやる」。そんなことが昔はあったが、その後はそれっきりになってしまった。

矢吹

そう言えば思い出した。私も子供の頃誰からか教わった。腐れ木の中の、くずれた中から出て来る白い大きな虫、頭の方が一寸黒かったかな、焼いて食べたなら、こうばしいいい味だった。

会長山内

私は、一生の半分以上木材の仕事をしてい

たが、工場の方が主な仕事で山の方の木の腐れは余り見る機会がなかったが、皆さんの話を聞いたら、自然の中に、腐れ木までが次の生命のためになっていること、つくづくと感じました。

蜂の仔は、私は食べたことないが、人の話では。土の中に巣を作る土蜂ぢあなかつたか、終戦頃になったら、開拓された土地に巣がつくられないから、土蜂も減ってしまった。食べる程の量がなくなつたのでせう。開拓当時は食べれるものは、栄養取るため、蜂の仔を食べた話は聞いている

徳永

大体、佐呂間の野性動物について、いい話が皆様から聞かされました。会長さん、可成り時間も経りました。今日はこの位で終らせてはどうでせう。

山内

それでは、今日は、この座談会に御参加くださいましたこと、お礼申し上げます。この中に、急にこの様な企てをしたものだから、皆様に、専門書を読んで、研究する時間もなかったこととせうが、私は、本日の座談会は、充分な実入りのあるものと思えます。

「そろまむかしむかし」の中に掲載して、後世の人々に、佐呂間の開拓当とその後の二・三十年の様子

の一部が判ってもらえるでせう。皆様御苦労様でした

冒頭にもお礼申しましたが、矢吹さん、穴戸さん、高田さん本日の御協力に厚くお礼申し上げます。

徳永

それでは本日の座談会を解散致します
冒頭に参加者人名入れたので
語り手省きます

文責 徳永良行

